閉会のあいさつ

龍谷大学社会学部教授・里山学研究センター副所長
村澤真保呂

ご紹介にあずかりました里山学研究センター副所長の村澤です。ご来場の皆様ならびにシンポジストの方々には午後１時より４時間以上にわたる議論にご参加いただきまして、心から御礼申し上げます。

これまで私たちは将来の持続可能社会の構築をめざし、近年はとくに滋賀県の琵琶湖水域圏を対象として、調査・研究に取り組んできました。今回のシンポジウムは、琵琶湖を中心とする従来の環境政策の課題を検討し、これからの持続可能社会を実現していくためのヒントを探ることを目的に企画させていただきました。もちろんその課題は、今回取り上げた主題だけで尽きるものではありませんが、それでも滋賀県の課題を考えるうえで大きなヒントがいくつも挙げられたように思われます。

前半の講演では、まず滋賀県琵琶湖環境部技監である三和伸彦氏から滋賀県のこれまで直面してきた課題とこれからの対応について、率直なお話をいただきました。東近江市市民環境部審議員の水田有夏志氏には、現在の東近江市が取り組んでおられる「100年の森ビジョン」について、その内容と課題をお話いただきました。いずれのお話も、滋賀県の問題というより日本全体、あるいは世界全体に共通する課題を浮き彫りにするものだったと思います。つまり自然共生型社会と持続可能社会への移行をめざして政策が大きな方向転換を始めていることは確かですが、現実にはこれまでの経済成長重視の政策とぶつかる面があり、財政や人材、市民社会の領域で生じるさまざまな課題をどう解決していくか、という問題に直面しています。

その問題はたしかに厄介です。しかし、それをもって諦めたり嘆いたりする必要はないでしょう。というのも逆にいえば、そのような具体的問題に突き当たるようになっただけ、私たちは理念のうえだけでなく、現実に自然共生型社会へと移行を進めているのだ、と前向きに捉えることができるからです。

後半の里山学研究センターの研究報告では、メンバーがそれぞれ異なる専門的立場から、滋賀県と持続可能社会をめぐる研究の成果と課題を報告させていただきました。それらの研究内容もまた、先のお二人の報告で示された課題と直接的につながるものが多くありました。今回のシンポジウムでは、私たち里山学研究センターの学術研究と行政の環境政策、市民社会の取り組みに共通の課題と方向性を確認し、三者の協力関係を深めていくために、たいへん有意義だったと思います。議論は継続していきたいと思っておりますので、ご来場の皆様方ならびにゲストの方々にはこれからもご協力・ご支援のほどお願いしたく思っております。本日は誠にありがとうございました。